

かかりつけ医の弊害

中央区 武富整形外科 武富 雅則（医師）

【目的】

かかりつけ医制度の弊害について症例を通じて報告する。

【目的】

7歳女性、サービス付き高齢者住宅入居中

【既往歴】

7歳時に右股関節結核に対して股関節固定術。

2001年 左大腿骨頭壊死に対して左人工股関節置換術。

2003年 右人工股関節置換術、この際寛骨臼骨折？

2006年 感染により右人工股関節ワイヤー抜去。

2008年 右人工股関節感染により病巣?爬、骨移植、再置換と3回手術される。

2014年 再再再感染で抜去、再置換術、更に感染、人工関節抜去、抗生剤入りセメントモールドディング挿入され手術に関しては終了となる。

【現病歴】

両肩関節痛が強く、かかりつけ医より往診依頼となる。往診時はほぼ寝たきり。右股関節頻回手術による痛みが強くプレドニゾン 10mg 分2、トラムセツト配合剤 3錠分、3デュロテツプ MT パッチ 12.6mg 処方されているため意識がうつろで傾眠傾向、右人工股関節置換術前には、痛みがなく独歩できていたにも関わらず、右股関節を動かすことができると言われ手術施行。その後頻回の入退院、歩行不能、休む間もない耐え難い疼痛を生じていることによりかなりの不満があることが問診から汲み取れる。長時間臥位による両肩関節可動域著明。

【現病歴】

初診時に介護福祉士や薬剤師も同席してもらい病状説明や経過を聞く。かかりつけ医が内科のためリハビリ指示や疼痛コントロール投薬に関しても調整することは難しい。神戸大学ペインクリニックにも通院しているがアドバイスだけで医師同士の連携は皆無、往診を増やすことも保険で査定されるため厳しい、集学的に治療を行うことが難しい症例を通じて問題を提起したい。